

## 📖 今月のおすすめ本 📖

### 『オスマン帝国英傑列伝』

著者名 小笠原弘幸  
出版者 幻冬舎  
出版年 2020  
分類番号 282.74/オ

13世紀末オスマン帝国が誕生し、その後領土を拡大しアジア・ヨーロッパ・アフリカの三大陸をまたにかける大帝国となり、繁栄・衰退しこの国が滅亡したのは1922年。まだ100年前ちょっとのことです。このように長く持続できるほど強力で繁栄したのはなぜでしょう。その理由の一つに、様々な出自の人々が活躍できた多民族国家であったからだといわれています。

この本は、君主たるスルタン3人、女性3人、美術・建築系の人物3人。さらに、オスマン帝国を滅ぼし、トルコ共和国の初代大統領 ムスタファ・マケルの計10人を取り上げ紹介しています。特に3人の女性、奴隷からスレイマン I 世の寵姫・后にまで登りつめた ヒュツレム、そのヒュツレムをも越え帝国史上最も権力を持った キョセム、20世紀 女性活動家から国の独立への革命家となり独立後は身の危険から亡命を余儀なくされたことから「トルコのジャンヌ・ダルク」といわれる ハリデ・エディプ。彼女らは歴史にどう影響を及ぼしたか、興味あるところです。

あまりムスリムに馴染みのない方でもその芸術の一つ、モスクはご存知ですね。元キリスト教のアヤ・ソフィア・モスク(聖ソフィア教会)をライバル視し、それに拮抗したセリミア・モスクを作ったミマール・スイナンも紹介されています。このモスク内の広いドームの空間と、多くの窓からの陽の光が満ちている姿は、特筆すべきところのようです。またこのモスクは、かのル・コルビジエも「エディルネの壮麗なる王冠」と絶賛したとも言われているので、ぜひ本物を見てみたいものです。

### オスマン帝国やトルコについての本

『WOMEN女性たちの世界史大図鑑』【367.2/ウ】

ホーリー・ハールバート ほか／監修(2019)河出書房新社

「女性 スルタンの政治」というページあります

『「女性をつくりかえる」という思想』【367.26/26/ア】

イラ・アブールゴド／編著(2009)明石書店

## 『東アジアの都市とジェンダー - 過去から問い直す』

著者名 小林ふみ子/染谷智幸  
出版者 文学通信  
出版年 2023  
分類番号 902/ヒ



この本は「近世から近代初期の江戸東京に視点をおき、同時代の東アジアの諸都市と比較しながら、その特徴を探り、人間にとって都市という存在の意義を問い直す」比較都市文化論です。

このなかの「日本の百貨店文化と女性作家」では、明治期の百貨店のPR雑誌において女性作家を創造の主体というよりもインフルエンサーのような意味で起用していたと指摘しています。もちろん今のファッション誌のように美人画のような表紙で目を引くことも忘れていません。百貨店でするので売るということを目的に内容的にみても、夫婦で売り場を巡るというような手法を用い店内の案内をさせ、販売戦略に沿わせています。これにより中心読者層である中流家庭の主婦をターゲットに、消費を通じた理想の家族像・国民像を作っていきます。また、コーヒーを飲む密会の場所として百貨店を使い、百貨店の盛り場としての面をみせることにより、単なる消費としての場所ではなく快樂的なアクションの場にもなりえるということを示唆しています。ジェンダー規範と結びつく、つかない両面を併せ持つ百貨店が、明治という混沌としていてそれでいて一つの方向性・ナショナリズムに向かって急速に変化し続ける時代を象徴しています。

近世ぐらいまで、日本は韓国・中国よりも儒教的規範の行動の制約は強くはなかったのが、現在のジェンダー指数を比べてみると日本のギャップは大きく、「他の東アジア各国の諸都市に比べて平等と公平実現に向けた反応が鈍く、変わるのが遅いところがまだまだある。」と締めくくられています。「東アジアの女性文芸を知るためのブックガイド」も付いています。ぜひ手に取ってみてください。

- 入口で特集予定の「関東大震災100年」「港区ゆかりの人物― 岡見京」の関連本です

### 『重ね地図でわかる！日本列島のしくみ見るだけノート』

著者名 鎌田浩毅/監修  
出版者 宝島社  
出版年 2019  
分類番号 455.1/カ

なぜ地震や火山の噴火、集中豪雨や台風、水害が起こってしまうのか、日本で起こるこれらの災害のしくみを地学的に図解で説明していく「見るだけノート」です。活断層や海溝を重ねて見る事ができる、また季節風・潮流・台風経路を重ねて見る事ができる重ね地図があります。「プレート」や「中央構造線」などの用語集もあり、分かりやすいです。地震だけでなく、気象現象から起こる災害について詳しい説明があり、今後の備えにでき、災害や防災のニュースの理解も深まる一冊になるでしょう。

『日本と巨大地震の関係』では、日本列島を取り囲む4つのプレートの接合部の限界から大地震の起こる仕組みが理解できます。また 海溝型地震は巨大地震になりやすく、1923年の大正関東地震(関東大震災)は、海溝型地震であるとの解説があります。

この頃の夏の天気は以前より暑いと言う人もいますが、猛暑日が増えているのは地球温暖化やヒートアイランド現象のためと言われていています。ただ猛暑が増えても今後の気候は、数十年は寒冷化に向かうと唱える地質学者もいるそうで、実際に大規模な火山活動により地球の平均気温が数度下がる現象の観測もされているそうです。今は暑いので冬が恋しく感じてしましますが、猛暑の増加が人間の生産活動が起こした人為的現象と考えると、地球環境についての責任ある行動をしていかなければならないと改めて感じます。

### 防災などの本

『地震・台風に備える防災BOOK』【369.3/シ】

(2019)マガジンハウス

『“今”からできる!日常防災』【369.3/1】

塚田 宏和/監修(2019)池田書店

## 『明治のナイチンゲール大関和物語』

著者名 田中ひかる  
出版者 中央公論新社  
出版年 2023  
分類番号 289.1/夕



現在は、看護師というと国家資格を持ち 彼らなしでは医療が成り立たない職業という認識が多いかと思われませんが、つい150年くらい前には「金のために汚い仕事も厭わず、時には命まで差し出す賤業」とみなされていました。それから専門的な教育を受けた女性の「トレインド・ナース(trained nurse)」の必要性が言われ始め、看護婦黎明期に職業として就いた一人が大関和です。

結婚から離婚、鹿鳴館時代の通訳、桜井看護学校、大学病院での経験など、資格を取り仕事に就き・・・とシングルマザーの大変さも交えながら、看護婦の仕事に邁進し常に全力で物事にぶつかっていく姿に共感しました。赤痢等伝染病や関東大震災などの実際の活動についてのエピソードに加え、和と看護学校で同期生だった鈴木雅の作った慈善看護婦会への協力や大関看護婦会へ、また看護についての文筆活動など、看護婦の技能の向上と制度化に尽力しました。この本は、明治という時代を生きた人達のエネルギーを感じる一冊です。

### 明治の医療関係の本

『看護婦の歴史』【498.14/ヤ】

山下 麻衣/著(2017)吉川弘文館

『明治を生きた男装の女医 高橋瑞物語 』【289.1/夕】

田中ひかる/著(2020)中央公論新社

